

この本についての読書体験を記せ、という教養教育推進センターから指示があつてから、さてこの本どこにおいたか、と自宅の蔵書を探したが見つからない。さては大学を卒業する時に古本屋に売ったか、誰かにあげたか、ともかく現在は直ぐには読み返すことはできない。しかし、相当なインパクトを受けた、という記憶は鮮明にある。大学入学時、1969年というのはいわゆる大学紛争（学生は闘争と称していた）華やかなりし頃で、僕の入学した京大理学部も半年間は授業がなかった。その間、別に遊んでいたわけではなく、クラスの同好の士が集まっているいろんな本を読みあつたり徹夜で酒の力を借りて議論を続けた「自主ゼミ」なるものを、下宿先や喫茶店や、時には学部の物理教室の部屋を借りたりして、行っていたのである。その「生命とは何か」をどこで、いつ、討論しながら読んだのか、自分だけで読んだのかは、記憶は定かではないが、入学時はいわゆる「湯川効果」によって物理をやって素粒子や宇宙のことを知りたいと思っていたものが、生命を、人間を、根本から知りたい、と方向を大転換させたのだから、大きなインパクトだったのだろう、と思う。

この本は、1944年に刊行され、日本では1951年に岩波から翻訳本（岡小天、鎮目恭夫・訳；新書版）が発刊された。僕が生まれた年に日本で刊行されたわけで、もう57年になる。あのワトソンやクリックもこのシュレディンガーの本にかなり影響され、DNA二重螺旋の発見に繋がったとされている。僕にとって、人生の進路を決めることになった書物は、実はこの本だけではなく、他に「物質・生命・宇宙<1, 2>」（小谷正雄・編・共立出版1969年）も挙げるができる。これは、僕が京大物理から阪大基礎工学研究科生物工学専攻に進学するときに、小谷正雄先生（1960年にできた日本生物物理学会の初代会長）の居られた（その時は既に退官されていたが）研究室に入ることになるきっかけを作った、という本であり、自然の階層性という考え方を与えてくれた。

エルヴィン・シュレディンガーは、量子力学の発展に重要な役割を果たした大物理学者であるが、「生命とは何か」を出版したときは57歳であった。1933年にディラックとともにノーベル物理学賞を受賞してから11年後のことである。この偉大な物理学者が書いた「生命」についてのこの本の意義は、生命を「物理理論」で解明できるだろう、という確信のようなもの、あるいは指針を与えたところにあると思っている。彼は、そこで非周期結晶（DNAなど生体高分子のこと）と遺伝情報の貯蔵との関係を示しただけでなく、生命という熱力学的開放系で自己調節と自己発生過程が発現するという概念、すなわち、今日の生体構造形成の原理の研究に繋がる発想も提示していたのである。僕も57歳になった今、もう一度シュレディンガーの思考履歴をたどってみたい気がする。